

2011年6月28日 京都府新聞夕刊

被災地への思い胸に

京都市出身のシンガー・ソングライター・豊田勇造が、恒例のベース・ギターライブを7月9日、京都市上京区のライブハウス拾得で開く。長年、東北地方でのライブ活動を支えてくれた大切な知人を、東日本大震災で亡くした。今回披露する新曲は震災前に作った歌だが、「震災後に歌詞が色あせるどころか、より深く感じられるようになった」といい、被災地への思いを胸にステージに立つ。



「日常を描くことで、現代の矛盾がみえてくる」と語る豊田勇造(京都市中京区) —撮影・三木千絵

京出身のシンガー・ソングライター 豊田勇造

1978年からほぼ毎年訪れている岩手県陸前高田市。震災の大津波で、海岸線から数百メートル離れた老舗のライブハウスは流され、主催者として豊田を招いてくれた写真店主の男性も亡くなった。

「車で避難中、徒歩で逃げていたお年寄り2人に乗せるため、同乗していた奥さんが降りた。高台に2人を運んだ後、残した奥さんを迎えに戻り、夫婦とも津波にのまれてしまったそうです」

震災時は、年に3カ月近くを過ごすタイにいた。テレビが東北の惨状を映し、ネットを通じて知人の被災状況も伝わってきた。

来月9日、上京でライブ

「震災後、歌詞深く」

た。心を痛めていた時、「こんな時だからこそ歌が聴きたい」と、宮城県気仙沼市で自宅を失った若い女性からメールが届いた。東北のライブの常連客だった。

新曲「虹のうた」には、「奪い合えば足りず、分かち合えば

余る」という一節が繰り返される。瀬戸内海に浮かぶ島の暮らしを描いた本にその言葉があり、歌詞を加えて穏やかな旋律をつけた。

旅行中のインドで食堂に張り出されていた詩は、現代の矛盾を端的に突いていた。「便利になって、忙しくなった」「大きな家に住んでいる。小さな家族で」…。これも新曲にした。

「穏やかな暮らしを続けていくことが、難しくなっている。普通であることが幸せ。震災で一層、そう思えるようになった」

午後7時開演。3000円。拾得番075(841)169 (斎藤英之)

かみやまの ぼんやり < 豊田勇造の歌を聞いた時 >
瓦屋根つづく細い道

- 1) 久しぶりに帰ってきた 瓦屋根つづく細い道
染色工場がひとつまたひとつ消え 年寄りばかり目立つ町のどまんなか
- 2) つい昨日まで強かった人が 体横たえ毎日
年老いていく人も町も星も それが定め命あるものの定め
- 3) 行ってみよかあの寺のほうへ 瓦屋根つづく細い道
あの人とやどった雨の日の木の下 時は指の間からこぼれていく
- 4) 風に乗って聞こえてくるのは、無言劇の鐘の音
節分の日に願いをこめた 炮烙が今日割られてる
ぼんやり

- 5) 商い人の声がある 瓦屋根つづく細い道
体ひとつがたよりの人たちが 辛いおかずで飯を食う
- 6) 巣へ帰る鳥のように 川へ戻る魚のように
深い記憶に刻み込まれた、ここが俺のふるさと
- 7) 午前二時行きかう人もない 瓦屋根つづく細い道
露地の角では地藏菩薩が、小さなともしび守ってる
- 8) 窓を閉め明かりを消し 体を横たえ目を閉じれば
深い寝息が聞こえてきて、今帰ってきた